

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル: Early neurodevelopmental problems and risk for avoidant/
restrictive food intake disorder (ARFID) in 4-7-year-old
children: A Japanese birth cohort study

和文タイトル: ARFID(回避・制限性食物摂取障害)スクリーニング陽性児の神経
発達と臨床的特徴: 日本の出生コホート研究

ユニットセンター(UC)等名: 高知ユニットセンター
サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: JCPP Advanced

年: 2022 DOI: 10.1002/jcv2.12094

筆頭著者名: Lisa Dinkler
所属 UC 名: 高知ユニットセンター

目的:

小規模な横断的臨床研究において、回避・制限性食物摂取障害(ARFID)は精神神経発達の問題との併存が多いことが指摘されてきた。本研究では、前向きに収集された出生コホート調査のデータを用い、乳幼児期の精神神経発達の問題が4-7歳におけるARFIDの傾向を予測できるかを検討した。

方法:

高知県のエコチル調査参加児3,728人の保護者を対象に質問票調査を実施。精神神経発達については、Ages and Stages Questionnaire-3(ASQ-3、生後半年-3歳に半年毎)およびESSENCE-Q(2.5歳時)を用い、1歳と3歳時に臨床診断の情報も質問票より取得した。ARFIDについては、参加児が4-7歳時に、新たに開発したスクリーニング用質問票を用いた。ASQ-3とESSENCE-Qの結果を統合してスコア化し、ロジスティック解析を用い、ARFIDと精神神経発達の問題および診断との関連を検証した。

結果:

3歳までの精神神経発達スコアの上位1割(=発達の問題が多い)の児は、4-7歳時点で、ARFIDスクリーニング陽性となるオッズが約3倍となった。なかでも、発達全般・コミュニケーション/言語・注意/集中・社会的相互作用・睡眠の問題がARFIDの傾向を予測できた。また、乳幼児期の摂食に関する問題よりもむしろ精神神経発達の問題のほうがARFIDの予測因子として重要であった。ARFID傾向のある児とない児の精神神経発達の軌道の違いは、1歳を過ぎたあたりから観察された。

考察(研究の限界を含める):

本研究は、非臨床集団を対象として乳幼児期の精神神経発達とARFIDの傾向について検討した初めての前向きコホート研究であり、その結果は、ARFID患者には精神神経発達の問題が多いという先行臨床研究のものと同様であった。また、本研究では、乳幼児期に多い摂食に関する問題ではなく、精神神経発達の問題の方が後のARFID傾向を予測する結果となった。研究の限界としては、ARFIDスクリーニングのための質問票が標準化されていないこと、ARFID傾向のある児が少数であったため多変量解析には参加児数が不足していたこと、保護者への質問票調査であるため客観性に欠ける可能性があること、ARFID質問票の回収率が56.6%で、過少報告の可能性が有ることなどが挙げられる。

結論:

乳幼児期(生後半年-3歳)に精神神経発達の問題が、4-7歳のARFID傾向を予測すること、また、乳幼児期に精神神経発達に問題がある児について注意深くモニターをすることでARFIDの予防の可能性が示唆された。成長につれさらに精神神経発達の問題およびARFID傾向は発生する可能性が高く、今後もより大規模な集団で同様の調査を実施することが必要である。